

# 異文化コミュニケーション

## NEWSLETTER: Intercultural Communication

No. 34 1999

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE  
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES  
1-4-1, Wakaba, Mihama-ku, Chiba, 261-0014 JAPAN

〒261-0014 千葉県美浜区若葉1-4-1  
神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所  
(Phone / Fax) 043-273-2324 (E-mail)icci@kanda.kuis.ac.jp

### 文化表象としてのツーリズム Tourism as Cultural Representations

安福 恵美子 (Yasufuku, Emiko)

Recently much attention has been paid to the social and cultural aspects of tourism. International tourism expresses various cultural phenomena related to modernity, especially in the context of globalization.

近年、世界的規模におけるツーリズムの量的拡大が、文化や社会の仕組みに大きな影響を及ぼしはじめるにつれ、ツーリズムと文化との関わりに対する関心が高まりつつある。そのため、ツーリズムの社会的・文化的インパクトに対するさまざまな調査・研究が行われつつある。

ツーリズムと文化の間には、密接かつ複雑な相互関係がみられる。そのため、ツーリズムを文化表象として考える動きが近年とくに活発になっている。文化を社会における相互作用の所産として捉えた場合、ツーリズムは、移動性を特徴とする近代における文化表現としてさまざまな研究領域の対象となる。

多様なツーリズム形態のなかでも、カルチャー・ツーリズム [文化観光] (たとえば、エスニック・ツーリズム [少数民族観光] やヘリテッジ・ツーリズム [遺産観光] など) においては、ツーリズムと文化の間にみられる複雑な相互関係が顕著である。ツーリズムは、ホストとゲストが出会うことによって、互いが異なる文化を認識する機会であり、異文化理解を深める可能性をもつ。しかしながら、異なる文化がツーリストのアトラクション (観光対象) となる場合、文化的差異がパッケージ化されることによって、イメージ形成やステレオタイプ化が生じる。それは、エスニシティ、文化的アイデンティティ、ナショナルリズムなどの形成においてみられ、その形成過程においては、ホスト社会、ツーリスト、観光産業、メディアなど、さまざまなファクターが複雑に絡み合う。また、ツーリズムにおけるホスト・ゲスト

ト関係においては、ツアーガイドなど、文化仲介者の存在が文化の呈示を考える上で重要なファクターとなる。それは、文化仲介者が文化をどのように呈示するかがツーリストの異文化理解に大きな影響を与えるからである。

ツーリズムは、差異の強調を特徴とする一方で、文化の画一化現象も生み出した。テーマパークを中心としたレジャー施設においても、その傾向が顕著である。レジャー活動としての人の移動現象は、集客による活性化を目指す都市空間における変化にもみられる。それは、ラスベガスのような都市のテーマパーク化にみられるように、ツーリズムが都市の景観に対して影響を与えるようになったことを示している。

ツーリズムの地域社会に対する経済効果としてよく謳われるのが雇用創出であるが、観光関連施設において雇用されるのは観光地周辺の地域住民ばかりではない。近代社会にみられる移動性はツーリストのみならず、観光地へ移動して観光関連施設で働くサービス提供者側においてもみられる。そのため、ツーリストを迎える立場であるホスト側にみられる移動性は、移民やエスニシティ研究において用いられるホスト社会という枠組みでは捉えることができないものであることから、ツーリズムを中心として形成されるホスト社会に対する研究への新たな視点が必要となる。

日本を訪れる外国人旅行者の数は日本人海外旅行者数の約4分の1ほどである。そのため、日本を訪れる外国人旅行者がどのような文化体験をするかについての研究は、日本人の海外における異文化体験の研究に比べ関心が低い。しかしながら、日本を訪れる外国人旅行者に関する研究は、その数の増加を期待するうえでも重要である。

世界的規模においてみられる、レジャー活動を目的とした人の移動であるツーリズムは、グローバルイゼーションの過程という観点からアプローチすることが可能であり、異文化コミュニケーション研究の対象となるものである。今後、ツーリズムと文化に対するさまざまな調査・研究が盛んに行われることを期待したい。

(阪南大学助教授、Associate Professor in International Tourism at Hannan University)

## 死の淵より観光と集客を考える Tourism, the Acquirement of People, and the Fear of Death

貴多野 乃武次(Kitano, Nobuji)

Tourism and the acquirement of people are similar social phenomena, but the relation between them is quite ambiguous. Liberating the fear of death is one of the most important aspects of getting people together. Any attempts to attract people, either sacred or secular, aim to conceal the abyss of death by gorgeous adornments. Thus, in order to analyze tourism and other various visitor attractions, the philosophical perspective of death must be taken into consideration.

「集客」を都市のビジョンや政策に掲げる都市が増えている。

「集客」という言葉は国語辞書には載っていない。その言葉が生まれたのは80年代半ばで、その頃日本経済は74年から始まった安定成長期を終え、その後バブル経済に突入していったのだが、まさにその転換点といえる頃に「集客」という言葉が生まれた。もちろん、それは産業界から生まれた言葉だが、88年に電通が『集客力』という本を発行したのが象徴的である。産業界のプロパガンダとしての役割とアンテナの役割を果たすことの多い電通がこの本を発売した88年が、わが国の「集客元年」といえよう。

「集客」を謳わなければならない背景には、集客できなくなってきた企業側の事情がある。「企業が集客できなくなってきた」ということをより正確に言うなら、企業がそれまでのように「大量」の顧客を集客できなくなってきたということであり、そうなると、集客することで成り立っている企業の「集客数×客単価＝売上高」という公式の「集客数」が小さくなるので、売上高が減少し、会社経営が苦しくなる。そうした集客企業の悩みが「集客」という言葉の背景にあった、というのは今日から振り返ってみた評論家的な見方だが、当時、わが国経済が円高不況を克服して力を強め、内需主導でバブル景気を予感させるような経済的雰囲気がかもし始めたことをいち早く敏感に察知した電通が、その本のなかに記したのは、「より大量」の集客を狙った数々の集客装置だった。

電通が紹介した「より大量」の集客装置は、テーマパークの乱立と、「リゾート元年」といわれた88年に、3,268の市町村に気前よく1億円づつばらまかれた「ふるさと創生交付金」によって乱造された施設に結実したのだが、それがわが国の観光の実態を象徴的に示している。

テーマパークはもちろん、1億円施設もほとんど

が観光のための施設だった。そして、ほとんどのテーマパークと多くの1億円施設が、今日経営難に直面しているし、早々と閉鎖、破産に追い込まれた施設も多い。1億円で金塊を買って、それを展示し観光客を集めるという、創造力も想像力のかけらもないわが国の観光の実態を嘆かざるをえないが、一方では、なまじ創造力と想像力を発揮してつくったテーマパークや1億円施設の現状を思えば、まだしも金塊が観光の魅力を露骨に見せてくれたことを、反面教師として私たちは感謝しなければならない。「観光」は「国の光を観る」に由来するという聞き飽きた言葉も、「国の光」を「金塊」と喝破した町によって生き返った。

観光と集客は、現象的にはよく似ているが、異なることも多い。観光についてはいくつかの定義があるが、集客については定かではなく、両者の関係も明らかでない。観光には集客が必要条件かということ、深山幽谷で1人楽しむのは観光だが、集客ではない。一方、葬儀は集客するが、観光ではない。産業論からは、1人で来ても、直接、間接の経済活動を誘発すれば、観光が目的なら観光産業である。一方、観光が目的ではないが、集客することによって経済活動を誘発すれば、集客産業である。そして、観光目的＝集客目的とは限らないことは上述のとおりだが、両産業が重なる部分は大きい。

観光を「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行うさまざまな活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」（「観光政策審議会答申 今後の観光政策の基本的な方向について」平成7年6月）と定義しても、各人ごとに余暇時間についての考え方が違うし、日常生活圏とはどこまでをいい、それからどれだけ空間的・時間的に離れることが観光なのか明らかでないし、触れ合い、学び、遊ぶというのはどういうことかも明らかでない。いわゆる、同答申で「観光産業は21世紀の経済を牽引する基幹産業であり、国内雇用を新しく創出する」と記され、「観光産業は、旅行産業、交通産業、宿泊業、飲食産業、アミューズメント産業、土産品産業、旅行関連産業等幅広い分野を包含した産業である」などと解説されると、観光産業はあまりに広範囲で、既存産業との関係が混沌としているにもかかわらず「21世紀の基幹産業」であるなどと軽々しく言うものだから、既存産業界は戸惑いを隠せない。

観光を社会現象として捉えるとき、今日、観光現象は経済活動となって表出することが多いが、そうした経済活動が観光産業論として体系的に整理されないまま、観光事業は個別に開発、成長、成熟、衰退のサイクルを歩んでいる。

観光対象（アトラクション）が「国の光」であるというなら、「国の光」を明らかにしなければならないが、わが国の観光文化論、観光産業論の多くは、それを枕詞に使うばかりで、「国の光」は少しも明らかにならない。J. Swarbrooke は THE DE-

VELOPMENT & MANAGEMENT OF VISITOR ATTRACTIONS のなかで、アトラクションを、1.自然のアトラクション、2.人工で集客を意図しないアトラクション、3.人工で集客を意図したアトラクション、4.特別なイベントに分類しているが、そこでもそれらのアトラクションの魅力の源泉は明らかでない。

観光と集客は現象的に一致することもあれば、異なることもあるということを知ったうえで、人が集まる「群衆」に着目したとき、カネッティが『群衆と権力』のなかで5つのタイプに分類した群衆に注目したい。すなわち、迫害群衆、逃走群衆、禁止群衆、転覆群衆、祝祭群衆の5つだが、これらの群衆に共通する、群衆を形成する必要条件は「死の恐怖」ではないかと考える。

迫害群衆は死の恐怖の裏返しとして生贄を求め、逃走群衆、禁止群衆、転覆群衆は、いずれも死の恐怖を拒絶するところに生まれ、祝祭群衆は死の恐怖を一時忘れようとするところに生まれる。

人が集まるのは、死の恐怖から逃れるためであるということは、究極の集客装置と考えられる宗教施設を思い出せば納得できるだろう。今年もメッカ巡礼に3月23日から27日の間、200万人の信者が集まったという。あるいはカーニバルに代表される祝祭群衆に死の影を読み取ることは難しくない。遊園地ではスリル度の高い遊戯機の人気が高く、スリル度がエスカレートし、バンジージャンプといった仮死体験に近い遊戯機まで登場した。

集客装置がきらびやかに装いを凝らすのは、その装いでもって死の深淵を隠そうとするからである。梶井基次郎が桜の樹の下に死体が埋まっていることを見つけ、萩原朔太郎が、遊園地で模擬飛行機に乗って「今日の果敢なき憂愁を捨て、飛べよかし！飛べよかし！」と遊んでいても、「思惟するものは寂しさで、その寂しさの底に死があった。私はきらびやかなネオンに彩られたラスベガスの町に死の恐怖が沈殿していることを発見した。

死の深淵を垣間見させることによって集客することができるし、死の深淵をきらびやかに装って隠すことによって集客することもできる。もちろん、人間は死の深淵が隠されていようが、明かされていようが、それと日常的に対峙することには耐えられないので、いずれの集客装置も、非日常であるか、異日常であるか、はたまた反日常であるかを問わず、日常と切断したところにつくられる。

観光や集客を考えると、このような哲学的といったいいような視点がベースにあると、産業論にも新しい展望が開かれるだろう。

いまひとつ重要な視点は歴史的な視点で、それは技術の進歩がもたらす社会の分散化ということで、特に20世紀の後半に発達した輸送技術と情報技術に注目しなければならない。なかでも情報技術の進歩は非同期の世界を生み、地理的場所の意味を消し去る。そのとき、人は集まり続けるだろうか？私た

ちはこの難問に早、直面している。  
(阪南大学教授、Professor in International Tourism at Hannan University)

#### 参考文献

Swarbrooke, J., (1995). *THE DEVELOPMENT & MANAGEMENT OF VISITOR ATTRACTIONS*. Butterworth Heinemann.

エリヤス・カネッティ『群衆と権力』岩田行一訳  
(法政大学出版局、1971年)

### 観光対象に付設された英文解説 The Use of English on Signboard Explanations at Historical Tourist Sites

武内 一良(Takeuchi, Kazuyoshi)

Although some signboard explanations at historical sites are written in English for the benefit of foreign visitors to Japan, many of these texts are not well organized. This article examines the use and level of vocabulary found in these on-site explanations at temples and shrines from the viewpoint of non-native English speakers.

総理府(編)(1998)の観光白書によれば、1997年の訪日外国人旅行者は対前年比9.9%増の4,218,208人と4百万人を突破した。こうした中、観光地における観光対象の邦文解説に英語が併記されていることは、日本語を理解できない外国人にとって重要な意味を持っている。運輸省運輸政策局は、1996年4月にウェルカムプラン21(訪日観光交流倍増計画)を策定し、案内表示の充実を重点課題の一つとして掲げている。また、この計画を受けて1997年6月には、外国人観光客の来訪地域の多様化の促進による国際観光の振興に関する法律(外客誘致法)が施行された。さらに1998年7月には、青森県が文化観光立県宣言を行い、同年11月には東北6県によるWAC21の第1回会合が開催されるなど、日本各地での外客誘致の動きも広がり始め、国内における外国人対応の重要性が認識されてきている。しかしながら、英語圏だけでなくアジアをはじめとする非英語圏からの外国人に対して共通に提供されている観光地の英語が、必ずしも的確でなく彼らに解かりにくいものとなっている可能性がある。一例として清水寺を解説した英文の書き出しを下記に示した。書体、文法、語彙などに問題を見出すことが出来る。

This temple, which belongs to the Kita Hoso

sect was founded by Enchin, the great priest, in the 8th year of Hoki (778 A.D.), enshrines in main sanctuary an image of Kannon (God of Mercy) Bosatsu (Bodhi-Sattva).

本稿は、このような英文解説の問題点に着目し、観光地として外国人に人気の高い社寺に焦点を当て、その入口などに付設され社寺の歴史や見所などを紹介した立札型の解説板に併記されている英文の語彙を分析し、難易度を計測したものである。分析の方法としては、竹林滋・小島義郎・東信行(編)(1995)の『カレッジライトハウス英和辞典』(研究社)を用いて、調査対象である英文解説の語彙を「中学基本語」、「高校基本語」、「日本語名称」、および「その他」の4つに類別し、外国人に解りにくいと思われる語彙の含有率を算出した。「日本語名称」とは、地名や歴史上の人物、時代区分上の用語などを指す。これには、一部 "Kyoto" や "Nara" など外国人でも理解可能な語彙もあったが、大部分は日本独特の固有名詞であり、外国人には難解であると推測される。日本の英和辞典が直接外国人の語彙力の基準を指し示すものではないが、語彙の難易度を計測する一つの指標として扱えることは可能であろうと考えられる。

表に示した10の社寺に見られる解説板は、すべて社寺の入口付近に設置されている邦文解説に英文が併記されたものであるが、春日大社については入口付近の他に、境内の本社前にも内容の異なった解説板が付設されており、標本としては11となった。分析結果としては11の標本の使用語彙数が合計で1,658語となり、その内訳は、「中学基本語」が998語で全体の60.2%、「高校基本語」が171語で10.3%、「日本語名称」が139語で8.4%、「その他」が350語で21.1%となっている。外国人にとって馴染みの薄い「日本語名称」と、日常生活において使用頻度が低く、難しい語彙とされる可能性のある「その他」の合計は489語となり、全体の29.5%に相当している。これは、社寺を訪れる外国人が「中学基本語」と「高校基本語」双方の語彙を理解し得るとした場合でも、英文解説の29.5%の語彙が解りにくくなる可能性を示唆している。同様に、「中学基本語」だけしか理解できない場合を想定すると、「高校基本語」、「日本語名称」、および「その他」の合計は660語となり、解りにくくなる可能性のある語彙は実に39.8%を占める。ここで言う29.5%や39.8%とは解りにくいと考えられる語彙の含有率であり、理解度を示すものではない。理解度については別の研究が必要と思われるが、単純に英文解説に使用されている語彙の約3割あるいは4割が解りにくい場合、日本文化や歴史的背景に関して事前の知識を持たないと考えられる外国人にとって、解説内容を把握することは極めて困難であろうと考える。

統計的には、日本人が外国を訪れるアウトバウン

ド観光に比べ、訪日外国人を扱うインバウンド観光の数は限られているが、さまざまな文化的背景の人々が社寺をはじめとする観光対象に触れる機会が増大していることは疑う余地がない。こうした外国人に対して観光対象を文字によって解説する場合、共通のコミュニケーション手段として使用する英語の語彙の選択には十分な注意が必要となる。

本稿では社寺境内における英文解説の現状を示したが、非日常を扱う観光分野においては、広く世界の人々に日本文化の一端を紹介するこのようなコミュニケーションの場合は意味のあるものと考えられる。こうした共通の言語として英語を使用する場では、今後語彙の検討が望まれるところである。

表 社寺における英語説明の使用語彙分析

1998年8月に写真撮影にて切り取った英文説明より作成

(神田外語学院国際観光科長/立教大学観光学研究科博士課程後期在籍、Director, International Tourism Course, Kanda Institute of Foreign Languages/Ph.D. Course in Tourism at St. Paul's University)

.....

国際研修施設ブリティッシュ・ヒルズ鳥瞰図

## Dreams from Outer Space 宇宙からの夢-その1

Everett Kleinjans

この物語は、筆者が他の銀河系からきた宇宙人となって地球を訪問する夢を見たというファンタジーの形式をとり、地球上に住む人々が自国、自民族あるいは自宗教に固執するあまりに起きる諸問題、各国間の人々の対立や抗争の大きさに触れ、本来地球の持つすばらしさを損なう事象を鑑みて、人類の未来に警鐘を鳴らすものです。

Before going to bed the other night, I stood and looked at the picture of the earth taken by the American astronauts from up in space. There we human beings are on this one small planet floating along in space among other planets in our galaxy all of which is part of a larger universe made up of thousands of such galaxies. How small we are! And yet how important we are to ourselves, to each other, and to a clearer understanding of what human life on this planet is and means.

That night I had a dream. I dreamt that I was a person from another planet coming into this galaxy with the earth out there in space. As I looked out my window, I saw blue, reddish brown and then green colors. With beauty like that, these earth people must experience deep uplifting emotions. I was sure that I would find compatible, cooperative beings on this planet.

I was able to land my craft without much difficulty and was soon surrounded by a rather large group of these beings. Amazingly, I was able to understand them (in dreams we all speak the same language!).

\*\* Hello. I'm from outer space.

-- Hello. Yes, we know. We saw you coming down in your space-ship. What do you think of our planet?

\*\* It's beautiful. From out there it is so marvelous, so serene. I have been eager to meet you because you must be wonderfully loving creatures.

A man stepped up and introduced himself as an American, saying he was a scientist. He said he was a member of the Nature Club.

-- The earth itself is wonderful and full of

marvels, but we people are beginning to destroy that beauty. You must have seen some of the pollution as you descended toward the earth.

Another person stepped forward and introduced himself as a Canadian.

-- Yes, and we in Canada get a lot of the acid rain that is created by industries in the United States. Thus, the environment is not merely a local or even national issue, it has become an international, I would even say, global issue.

\*\* Would you explain Canada and the United States to me, please?

-- You don't know that? Well you see, you landed in the United States and we Canadians are north of the United States on the North American continent.

\*\* But that doesn't make sense to me. How can you tell where the United States ends and Canada begins?

-- That's easy. You gotta go through customs to get to Canada, ... but I guess you don't know what customs are either, do you? You didn't use them to get here.

\*\* No.

-- Well, if you had a map of the world -- Anybody here got a map? -- you would see a line drawn between the two countries. The border stretches all the way across the North American continent from the Atlantic Ocean to the Pacific Ocean.

\*\* That's funny. I didn't see any lines on the North American continent when I was approaching the earth. Are these lines important?

At that moment another person stepped up and introduced himself as a German. He spoke English with a different accent. He was carrying a piece of paper.

-- These lines are very important. Here's a map. (pointing to the paper he was carrying) Here is the United States and here is Canada. (pointing) This is the line they were talking about which divides the two countries.

\*\* Yes, I see the line. But certainly that is an artificial line made by human beings on your so-called map, not anything that is placed there by nature.

-- You're right. Someone did draw the lines; but they are very important. How else can

you tell who you are? For example, here is Europe.

\*\* Oh yes, that little projection of land sticking out from this great huge land mass?

-- Yes. I guess you could talk about it that way if you like. (He seemed a bit miffed.) But, European civilization is the greatest the world has ever known, the highest forms of religion, art, and philosophy. Yes. And the highest level of morality. The grandeur that was Greece and the glory that was Rome; that is our heritage. Very important to the cultural evolution of the human race.

\*\* Really? Maybe I should have landed there.

-- Well.. But now about those lines. Here you see the German nation. I am from there and so am German. Here is France. The people living within those lines are called French. We fought each other in three major wars between 1870 and 1945 -- The Franco-Prussian War and World Wars I and II.

\*\* Wars? What does that mean?

-- Well, people from one nation take guns and other weapons and shoot at and kill people from another nation and then the winner occupies the loser's land.

\*\* These wars; are they part of your civilization, evidence of your high forms of philosophy, religion and morality? Or are they art forms through which you exhibit your athletic and artistic beauty? And do you really kill each other over lines on a map which on paper separate one nation from another? How can you tell one soldier from another? I see that some of you have different colored skin but the first fellow who talked to me was an American, the second a Canadian and now you say you are German. You people all look pretty much alike to me.

A man with darker skin in a high turban stepped forward and in a slightly different kind of English said.

-- This is one of the troubles with the Europeans. They think they are the world. In India we call the First World War the European Civil War. It was basically Europeans killing other Europeans. It wasn't the world!

\*\* Killing? Do you understand why they

would be killing each other? Do people where you are from also kill each other over these lines which are in your head and then placed on a piece of paper that you call a map?

-- Well, you see there is a big difference between Germans and Frenchmen. (The German was speaking again.) We have different cultures. We speak different languages, eat different kinds of food. We Germans are prompt and energetic, the French are not punctual and constantly say, "Se La Vie" or, that's the way life is. Besides, they think they are better than we are.

The man with the high turban spoke again.

-- And we don't kill each other over lines on a piece of paper as much as for the beliefs we hold. There is a big difference between Hindus and Muslims.

\*\* What are Hindus and Muslims?

-- They are adherents to different religions, Hinduism and Islam.

\*\* Really! ? Where I come from religion deals with ultimate things, with the dimension of depth in human existence and thus what makes people human. It promotes peace, hope, love and joy.

-- Well, so do ours. And still we find not only Hindus fighting Muslims in South Asia, but also Christians and Muslims fighting each other in Lebanon, and Jews getting into the same situation, and even Christians fighting and killing Christians in Northern Ireland. And, of course, in the former country of Yugoslavia, people killed each other and women were raped because they come from different cultures. They called it cultural cleansing, or genocide.

I found myself wondering what kind of people these were, these earth people. Did they all live together on the same planet? Although they had a different color of skin, hair and eyes, they looked basically alike to me. The only thought which came to mind was that, since they all came from the same natural world, their perceptions and feelings inside must cause them to behave the way they do. (to be continued.)

(Former President of East-West Center)

## 研究所からのお知らせ

### 新所長就任

1999年度より、当研究所所長として神田外語大学石井米雄学長が就任いたしました。以下は簡単なプロフィールです。

神田外語大学学長。法学博士。京都大学東南アジア研究センター所長・教授、上智大学アジア文化研究所所長・教授を歴任。著書に「メコン」（共著、めこん 1995年）、「東南アジア世界の歴史的位相」（編著、東京大学出版会、1992年）「東南アジアを知る事典」（監修、平凡社、1986年）、「上座部仏教の政治社会学—国教の構造」（創文社、1975年）等があります。

### 紀要『異文化コミュニケーション研究』 第十一号古田暁教授退任記念号発刊

紀要『異文化コミュニケーション研究』第11号を発刊いたしました。収録論文のタイトルと著者名は下記の通りです。またご希望の方には実費でお届けいたします。

#### 11号収録論文タイトル及び著者名

Emotions and Intercultural Communication

David Matsumoto、竹内 幸子

対人コミュニケーションにおける文化差と普遍性

- 表情と感情の心理学的研究の視点から -

中村 真

Chinese in Japan: Encounter with a Different Group Consciousness

瀧光 洋子、Ling Chen、Gustav Friedrich

「面子」の多面性に関する一考察 - 在日台湾人男性のケース・スタディを通して -

末田 清子、蔡 小瑛

Beauty and the Beast in the Brain

Edward C. Stewart

日本人の非言語コミュニケーションに関する

英文文献 (1966-1997)

三池 賢孝、石井 敏

### 紀要『異文化コミュニケーション研究』 第十二号論文募集

『異文化コミュニケーション研究』第12号は非言語コミュニケーション特集号で獨協大学石井敏先生の責任編集を予定しています。また、次の論文を募集しています。

募集論文：異文化非言語コミュニケーションの質的・量的研究、その他。

論文 : 20000語 切 : 8月31日  
提出先 : 当研究所 提出方法 : E-mail又は郵送  
詳細は当研究所までお問い合わせ下さい。

### 第9回異文研 夏期セミナー

当研究所が主催する第9回目の夏期セミナーは「国境を越える文化 転換期のアジア」をテーマに福島県新白河のプリティッシュ・ヒルズで開催されます。昨年のセミナーでは「アジアの中の日本」というテーマのもとに、「沖縄」や「華僑・華人の世界」などを含めた地域文化との関連で議論しましたが、今回は、それをさらに拡大して、アジアの諸地域と日本との関わりや文化の移動についての議論を展開することをねらいとしています。

第1日目には、6名の参加者から、研究発表を行っていただきます。(研究発表は各発表者の持ち時間が質疑応答を含めて45分です。発表者は公募しています。)その後、セミナーの趣旨に沿って2つの基調講演を予定しています。講演では、経済、コミュニケーション、歴史、文明論等で著名な国際大学教授の公文俊平氏に「21世紀の情報文明と文化」(仮)という題で、講演では、華人社会研究およびアジア経済に詳しい亜細亜大学教授の游仲勲氏に「21世紀のアジア経済と日本」という題で、それぞれ講演していただき、セミナーへの問題提起をしていただく予定です。

第2日目には、セミナーのテーマに関連した分野、教育・研修方法、さらには、アジア・太平洋地域の相互理解を目標にしてつくられたハワイの東西センターについてなど、計7つのワークショップが午前(A)と午後(B)各々2時間半ずつ開かれます。このワークショップの一部は第3日目の午前(C)にも開かれます。原則としてどのワークショップも2回実施されますので、参加者は自分の希望するワークショップを3つまで参加できることとなります。

ワークショップは次の通りです。

アジアはどう報道されてきたか(神田外語大学教授、永井浩氏) 韓国における日本の大衆文化の受容と葛藤(東京工科大学助教授、李光鎬氏) 日米の経済進出とタイの対応(名古屋市立大学客員教授、E.C.スチュワート氏) インターネット文化とアジア(仮)(麗澤大学教授、浦山重郎氏) ジェンダーは国境を越えられるか(神田外語大学助教授、ギブソン松井佳子氏) ハワイ・東西センターの足跡と課題(東西センター元所長、E. クラインヤンズ氏) 身体運動とリズムを使った異文化研修(神田外語大学講師、川上ホーリ氏)。

夕方に開かれる懇親会の後には、特別プログラム「ベトナムの夕べ」(海外生活アドバイザーの樋口容視子氏による「不思議の国ベトナムとベトナム人とのコミュニケーション」)を予定しています。

第3日目は、前日に続いて、計4つのワーク

ショップが実施されます。昼食後はセミナーの総括として、分科会（ラウンドテーブル・ディスカッション）「異文化コミュニケーション研究と教育の発展に向けて」が開かれます。セミナーで得られた知識や意見などを、それぞれの視点から整理し直し、異文化コミュニケーション研究と教育の諸問題や今後の方向性についてコーディネーターを中心に討議し、同時にセミナーの成果の確認と次回への方向づけをしていただきます。分科会のテーマは、言語・非言語研究 日本研究 研究方法 コミュニケーション教育 情報メディア 異文化研修 「異文化間研究組織づくり」となっています。参加者は上記の7つの分科会の一つに参加していただきますが、セミナー開催中に5名以上の人数が集まり、コーディネーターを決めることができれば、その他のテーマで分科会を実施することも可能です。

#### 参加申し込み方法

御希望の方には開催案内をお送りします。参加申し込み締め切りは6月25日（金）です。尚、研究発表の発表者を参加者の中から6名募集します。また、大学院生を対象にインターンシップ制度（参加費優遇制度）があります。詳しくは当研究所までお問い合わせ下さい。

### 学会研究会予告

#### 第16回（平成11年度） 情報通信学会大会

6月11日（金）と12日（土）の2日間にわたり、柏市の麗澤大学モラロジー研究所研修館において開催されます。これは、「情報通信月間」の参加行事の一つです。

参加費：会員3000円、学生1000円、一般5000円  
懇親会費：4000円

申込先：

財団法人情報通信学会 事務局  
〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-9-4  
久保寺ツインタワービル  
TEL 03-3237-2815 FAX 03-3237-2816  
E-mail LDL03303@nifty.ne.jp  
http://www.soc.nacsis.ac.jp/jsicr/

#### 異文化コミュニケーション研究会 6月プログラム

日時：6月21日（月）7:00p.m.～9:00p.m.

場所：麗澤大学東京研究センター 4階

（新宿駅、アイランドタワー内）

内容：「差別といじめ」 演劇を通しての解決への試み

講師：アンディ・ヒクソン氏（作家・舞台ディレクター）  
言語：英語  
会費：会員：千円 非会員：2千円  
問い合わせ先：異文化コミュニケーション研究会  
（SIETAR-Japan）  
TEL 03-3580-0286

#### マス・コミュニケーション学会 1999年度春期研究発表会

期日：1999年6月26日（土）、27日（日）

場所：北海道東海大学 札幌キャンパス

第1日（6月26日）

10:00～11:50 個人・共同研究発表

14:20～16:50 ジャーナリズムの社会的責任・再考

第2日（6月27日）

10:00～12:30 マスメディアとしてのインターネット

13:30～16:30（以下は主なワークショップ）

- ・「電子ネットワーク上の“インタラクティブ・コミュニケーション”によって生み出される“バーチャル・コミュニティ”の可能性と問題点」
- ・「子どものテレビ視聴とリアリティ形成」
- ・「日本におけるインターネット上での電子出版を取り巻く環境」
- ・「メディアの議題設定機能」

連絡先：

〒005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1  
北海道東海大学 マス・コミュニケーション学会  
大会本部 N208室  
TEL 011-571-5112 内線266（当日限り）  
北海道東海大学 札幌キャンパス  
TEL(代) 011-571-5111

#### The Summer Institute for Intercultural Communication 1999

Session1: July14-16

Session2: July19-23

Session3: July26-30

For more information, please contact:

The Intercultural Communication Institute  
8835 SW Canyon Lane, Suite 238, Portland,  
OR 97225, USA  
Phone: 503-297-4622 Fax: 503-297-4695  
E-mail: ici@intercultural.org

#### 編集後記

\*クラインヤンズ氏のDreamsは次号に続きます。ご期待下さい。\*多くの寄贈図書ありがとうございます。今後も文化とコミュニケーションに関するテーマで論文を執筆された方は是非、一部ご寄贈下さい。\*見渡せば新緑から青葉に変わる幕張キャンパスで「霧のブリティッシュ・ヒルズ」に思いを馳せています。